

学位取得のすすめ ～博士(獣医学)及び博士(医学)取得の経験から～

中本裕也[†] (Neuro Vets 動物神経科クリニック院長)



1 はじめに

筆者は、2025年3月に京都大学より博士(医学)を授与された。2011年に山口大学より博士(獣医学)を授与されていたため、Double Doctorateとなった。国内では博士号取得者の数の割合が年々減少傾向にある。これは取得後に活躍するポストの不足や経済的理由などから、博士課程への進学を敬遠する傾向があるからではないかとされる。しかし、それ以上に博士号取得者の経験談に関する情報の少ないことが、実際の一步を踏み出すうえでの支障になっているのではないかと個人的には感じている。このことから、自らの学位取得に関する経験を記述することで、後進の一つの指標となれば幸いである。

2 博士号の取得方法

博士号は特定分野における高度な研究及び独創的な学術的貢献を認められた者に授与される最高位の学位である。国内においては主に「課程博士」と「論文博士」の2つの取得形態が存在する。課程博士は大学院博士課程に在学し、指導教員のもとで研究を進めて学位論文の提出・審査を経て授与される。これには、就業している社会人が仕事と両立しながら大学院博士課程に在籍し、学位取得を目指す形態(社会人博士課程)も含まれる。論文博士は大学院博士課程に在籍せずに独自で研究を積み重ねた成果を学位論文として提出し、審査・公聴会を経て学位を取得する形態である。これは実務経験をもとにした研究成果などが対象となる場合が多く、研究の質や量ともに高度な水準が求められるとされ、学位論文の提出には各大学が定める一定の研究歴が必要となる。私は、博士(獣医学)は社会人課程博士として、博士(医学)は論文博士として学位を授与された。

3 博士(獣医学)の取得

2007年10月に山口大学大学院連合獣医学研究科に課

程博士(社会人特別選抜)として秋季入学した。自らの卒業大学であったことから、受験前に指導教員と事前に研究内容に関する相談を行ったうえで入学試験を受験した。大学院入学後は所定の単位を取得するためにレポートの提出や夏季に実施されていた合宿形式の集中講義などに参加した。まとまった休日を取ることが社会人として大変だったと感じるものの、他大学の学生や留学生、そして教員の方々との交流は自らの研究内容のブラッシュアップだけではなく、他者の研究内容や考え方を学ぶ貴重な経験となった。大学卒業後は一般診療に携わる傍で、当時は大学の施設以外では目新しかった磁気共鳴画像(MRI)検査の施設に従事していた経験と得られたデータから、犬のライソゾーム病におけるMRI診断の有用性に関する研究を行うこととした。ここで感じたことは、大学時代の研究を継続して博士課程に進む場合を除くと、大学院に入学してから新たに研究内容を検討し始めることは大変だということである。所定の年数の中で論文発表及び博士論文の作成を行うには時間的な猶予が少ないため、事前に研究内容を検討し、その資料となる研究題材やデータなどを蓄積したうえで大学院に入学することが、特に社会人博士課程入学者には必要である。

4 博士(医学)の取得

獣医神経病に興味を持って研鑽を積む中で、脊髄損傷の犬や猫に遭遇する機会が多かった経験から、脊髄損傷に対する再生治療の研究に興味を湧いた。就業施設から比較的近かったこともあり、京都大学医学部において脊髄再生治療に関する研究を行いたいと考えた。明確なコネクションがあったわけではなかったため、京都大学大学院医学研究科に在籍していた旧友を通じて京都大学再生医科学研究所(現在の医生物学研究所)の教員を紹介してもらった。1年間オブザーバーとしてカンファレンスに参加させていただく中で研究についての意見交換を行い、その後に研究室への入室許可を得て在籍・研究を実施(施設を利用しながら研究を行う形態)することとなった。卒業大学ではないことから、施設の使用手法や

[†] 連絡責任者：中本裕也 (Neuro Vets 動物神経科クリニック)

〒604-0981 京都市中京区毘沙門町550番地4 京都動物医療センタービル4階

☎075-255-1374 FAX 075-255-1370 E-mail: neuro_vets@yahoo.co.jp

想定していた研究が実施可能なのかといったことが不明であったが、事前の意見交換の中でこれらを確認でき、スムーズな研究の実施につながった。論文博士は課程博士と異なり、規定の研究歴は必要であるもののじっくりと研究を行ったうえで学位申請を行うことが可能であるため、時間の制約を受けずに研究ができたことは有意義であった。

5 さ い ご に

学位は足の裏についた米粒と言われることがある。その意図は、「取っても食べられないが、取らないと気持ちが悪い」ということのようなのである。現状、学位が必要となるのは大学教員などの職種に限られるかもしれない。しかし、取得する中で筆者が感じたのは、学位を取得する過程で学んだ「自らの頭の中で論理的に考えたう

えで新たな課題を見つけ、それを専門的に解決していく」ことだった。獣医師という専門職は動物、さらには人間の生命に関わる職業であるため、知識を得るための勉強は常に必要であり、6年制大学を卒業した科学者としての高い視座を持つことは大変重要である。学位の授与は通過点であり、そこで得られた経験・考え方を継続することも大切である。

博士号を授与されるまでの道のりが険しいことはいうまでもない。また、自分1人で成し遂げることはできず、さまざまな人たちの協力が必要である。私の場合も家族や病院スタッフ、大学教員をはじめとするたくさんの方々の協力を得ながら研究や論文執筆などに時間を割き、論文内容の精査や発表を行ってきた。改めて感謝すると共に、今回の体験記が博士号取得を目指す後進の一助となることを願う。